

終の棲家へ

その土地の風土を受けとめ、

風土と折り合っている家には

時を経てもすり切れない尊さを思い

感動します。

素のままの自分をいつも見守り、

息長く家族を受けとめてくれる家には

体も心もゆだねられます。だから、

この家で住まう毎日がずっと続くことを

信じられるのです。



風土を受けとめられる家は美しい

K邸の佇まいを見て考えました。たとえば、ストックホルムやコベンハーゲン、日本なら白川郷のような街並みを私たちが美しいと思い、感動するのはなぜか。

どの街でも、各々の土地の気候に適うように、素材を選び、家の形や建て方を工夫したことでしょう。だから感があつて、周りの風景にも馴染んでいる。何百年もの間、家は家として住み継がれ、街は街として生き続けている。古くなつた家を直すのにも、新しい家を建てるのにも、同じ考えが貫かれている。そんなふうに時を経てきた家や街並みに私たちは尊さを思うのかもしれません。

K邸もこの地域の風土に寄りそなう、無垢の木材など自然素材を選び抜き、自然の恵みである光や風を屋

内や庭へ上手に取り込む設計を施しています。施工の仕方も、子世代が住み継ぐことを前提にメンテナンス性や可変性に配慮しました。一方で、断熱グレード最上級のG3レベルを確保し、寒さ厳しい冬を安心して過ごせる性能も備えています。K邸は、風土を知り、風土を受けとめられる工務店だからできた家なのです。

Kさんはわが家を誰に託すか決めたため、さまざまな設計事務所や工務店を巡つたといいます。最初に出会つた湯本建築設計にも8回ほど通い、社長や設計担当の話に耳を傾けました。そうして2年を経て、同社へすべてを任せることにしました。要望は2つだけ。「ピアノを楽しむ家」であること、そして、「最期を迎える家」になること。



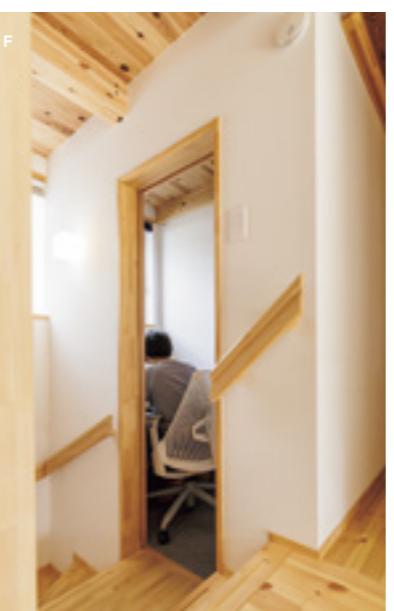
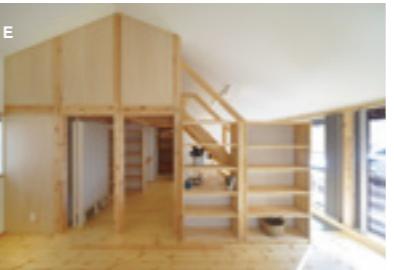
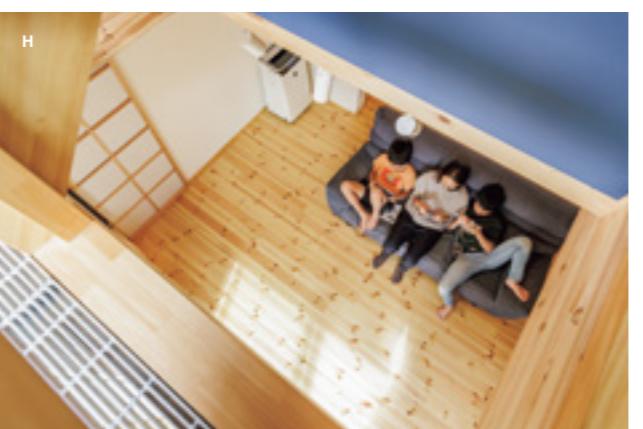
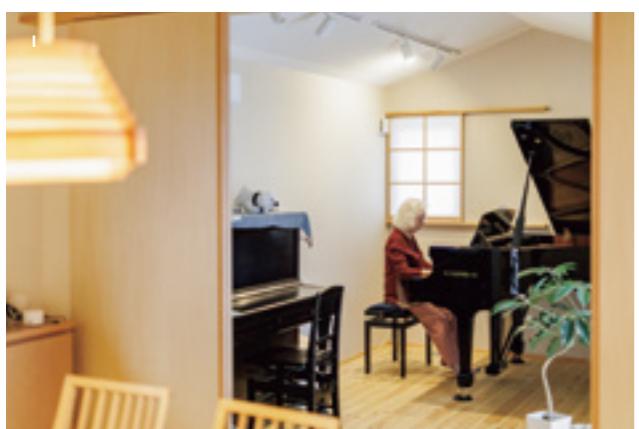


光でつながる空間、音でつながる家族
屋内に入つてみましょう。
リビングはこの家と一緒にあつらえ
た庭に面しています。その緑を介して
差し込む、あるいは吹き抜けから投
げ掛けられる光のなんと豊かで優しい

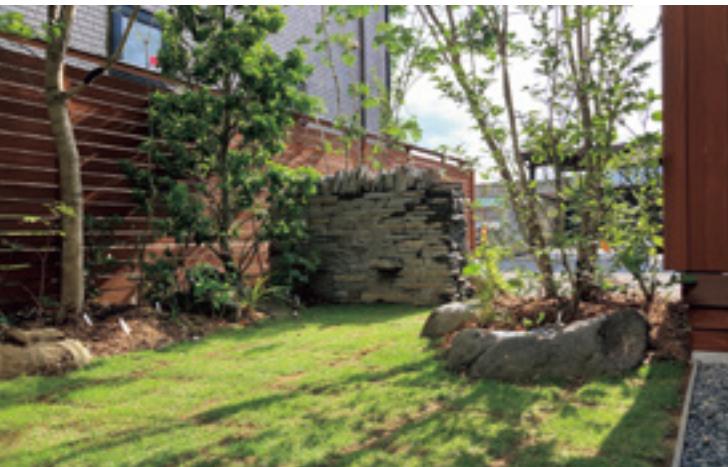
こと。おのずと伸びやかな気分になり
ます。
さらに、障子越しの光の柔らかさに
誘われ思わず床へ腰を下ろせば、そこ
で見上げた天井が程よく高すぎないこ
とも和むはず。日本人がずっと親し
んできた居住まいや、暮らしの中の立
ち居振る舞いに即したスケールの空間
構成に、得も言われぬ落ち着きを思
います。

光は一階だけでなく2階にも、さ
らにロフトにもあふれて、その朗らか
さは建て込んだ住宅地にある家のもの
とは思えません。光が届くところへは
人の気配も届きます。空間も家族も
光でつながるのです。
近所に住むピアノ好きの母と、子ど
もたちや自身も折にふれ演奏できる
よう要望したピアノ室は、ダイニング
の隣に設けられました。遮音に配慮
した室内では奏者が心置きなく音楽
と向き合う一方、ダイニングやキッチン、
リビングでは、その気配を感じな
がら過ごす家族の姿があり、音楽と
暮らしがほどよい距離感で共存してい
ます。

風土を受けて風土と折り合う家
には、家族が過ごす時間への細やかな
心配りも随所にありました。



A_リビングへは、天井高いいっぱいに設えた障子や吹き抜けから、たっぷりの光を取り込んでいる。無垢の木をはじめ自然素材も映える清々しい空間。**B**_障子で覆って、ガラス窓を介して、窓を開け放って、それぞれに感じる庭の姿や光や風の違いに、日本人の情緒が動かされる。**C**_ダイニングキッチンも自然素材の優しさにあふれながら、清潔感ある仕上がりに。リビングより開口が小さく、しっかりと落ち着きもある。**D**_遊び心あふれるロフト。ここへも吹き抜けの光が巡ってきていた。
E_子どもは3人。2階のこのスペースを分け合っている。可変性があるので、各々の成長に応じて仕切ることもできる。**F**_階段の途中に設けたご主人の書斎。ここも自分と向き合えるミニマルな空間。**G**_2階は、ロフトを含めた縦への広がりが間延びしない高さを見切った。ロフト下の学習スペースは宿題に読書に集中できそう。**H**_リビングの真上にあたる窓際の床はグレーチングにして、2階から1階へ光を通わせている。歩いていても楽しい仕掛けだ。**I**_ご主人のお母さんは近くにお住まいでの時折ここへピアノを弾きにくる。「母親に気兼ねなくピアノを弾かせてあげたい」との思いも、Kさんが家を建てる際の願いだった。



かつて、家は新しい命が誕生する場であり、家族の最期を看取る場所でもありました。家は、人の誕生から終わりまで、その悲喜こもごもを受けてきました。けれど、いつの間にか家は、その役割を担うゆとりをなくしたように思います。

何もかも移ろいゆく毎日の中で、人の体や心もまた、昨日と今日とで同じではありません。その変化に人が気負いも我慢もせず、素のままで向き合い続けられる家。そうした変化に寄り添い、ずっと見守り、受けとめてくれる家こそ、「最期を迎える家」ではないか。K邸を見ているとそういう感じます。

風土と折り合う家だから末長く住まえることも、G3の断熱性で心地よく過ごせることも、光や音で家族がつながることも、庭の職人が手積みした石垣のこちら側に家族だけの時間と世界を約束していることも、すべて息長くKさん一家の暮らしを受けとめるために欠かせないものでした。ここはだから、「終の棲家」となるのです。

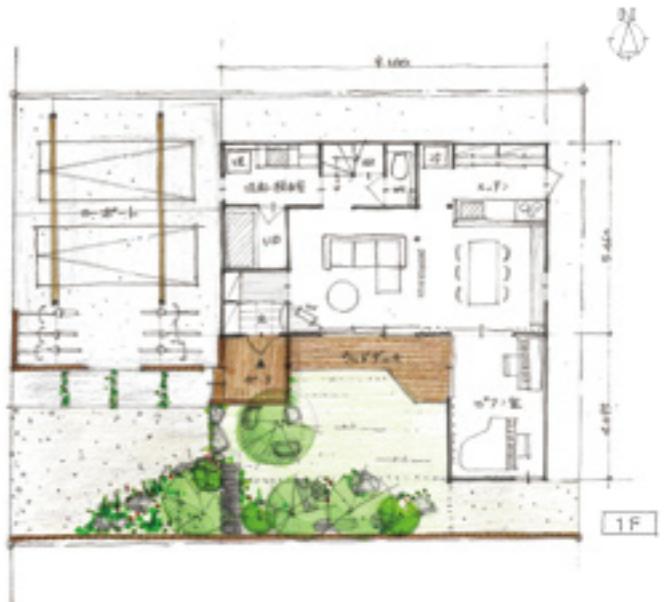
体や心の変化も含め、家族を息長く受けとめる家



DATA

敷地面積: 204.30m²(61.68坪)
1階面積: 60.86m²(18.37坪)
2階面積: 48.02m²(14.50坪)
ロフト面積: 17.39m²(5.25坪)
延床面積: 108.88m²(32.87坪)

PLAN



性能データ

UA値: 0.23 W/m²k
気密性能: 隙間相当面積C値: 0.25(気密測定値)
住宅性能表示: 断熱等級7
HEAT20: G3レベル
断熱性能: Q1住宅
耐震強度: 耐震等級3(許容応力度計算による)

空調設備

冷暖房: 冷暖房パネルヒーター
換気: 第3種換気

その他

長期優良住宅
太陽光発電パネル6.52kW搭載

